

# 火山と共生する地域づくりを目指す 十勝岳ジオパーク

## 十勝岳ジオパーク

美瑛町・上富良野町は、北海道の中央に位置し、大雪山国立公園（十勝岳連峰）の恵まれた自然環境と農業・観光を基幹産業とするエリアです。

このエリアの特色は、火山活動によって生まれた「波打つ大地」に、農林業の営みが生み出す美しい農村景観があります。しかし、火山は貴重な地域資源を創造してくれる一方で、生命財産を奪う大きな災害をもたらしてきました。

火山活動によって生まれた大地では、人々の苦勞と希望の結晶として豊かな農作物が実り、温泉は癒しを与えるなど貴重な地域資源が多く存在し、継承されてきました。

そのため、この地域資源の魅力を守り、学び、広く発信して、火山と共生する質の高い地域づくりに取り組むことで、将来にわたって住民が地域に誇りを持つことができる持続可能な発展を目指すために、ジオパークのプログラムを進めています。



基本目標
(1) いつかおきる火山災害に2町で協力して備えたい
(2) 火山と自然について地域みんなで学びたい
(3) 恵まれた環境とふるさとの文化を将来に残したい
(4) 地域を愛してほしい
(5) 世界の様々な地域と連携・情報交換したい

認定後の新ポスター

## 十勝岳ジオパークが展開するテーマ

### 「丘と火山がおりなす彩り」

およそ300万年の間に、現在の大雪山～十勝岳連峰付近で起こった大規模火山噴火による火砕流堆積物が積み重なって丘陵地になり、100万年前から現在までの火山活動によって、十勝岳連峰がつけられました。現在の美しい丘の景観は、入植以降の農耕者のたゆま



会長 角和浩幸美瑛町長



副会長 斉藤繁上富良野町長

## 十勝岳ジオパーク推進協議会

『十勝岳ジオパークは、2022年1月28日、日本ジオパークに認定されました』

ぬ努力によつてつくられたもので、その積み重ねられた歴史・文化はこの地域の象徴です。そ



十勝岳を背景に歴史を伝えるジオガイド

として、いまなお火山活動を繰り返す十勝岳には溶岩流・火砕流・泥流など噴火の痕跡が多く残され、地球が生きていることを実感できます。

この地域を代表する特色を伝えるために、2018年に十勝岳ジオパークのテーマを制定しました。

### 十勝岳ジオパークが取り組む3つのストーリー 北海道の屋根 十勝岳ものがたり 繰り返される噴火と人々の共存

十勝岳は、およそ30年周期で噴火を繰り返してきたことから、溶岩流・火砕流・泥流など様々な噴火の痕跡を残し、それらをよく観察・実感できる貴重なフィールドを持っています。このような周期で噴火を繰り返してきた火山の

営みを学び、噴火に翻弄されながらも共存してきた人々の営みを紹介します。このストーリーを展開する施設



1988年の十勝岳噴火  
(写真は旭川地方気象台提供)

には、十勝岳の火山活動を24時間体制で監視しながら、また避難所や学習の場としての機能をもつ「十勝岳火山砂防情報センター」があります。



十勝岳火山砂防情報センター

### 大地に育まれた火山と共生する美しい丘のまち 火砕流と農業のコラボレーション

大規模火砕流によってつくられた波状丘陵も、原生林や原野であったときにはその地形の全貌を見ることができませんでした。およそ130年ほど前から、この地に入植した開拓民が原生林を切り開き農地にすることによって波状丘陵が認識されたのです。火砕流の大地はその地形と相まって水はけもいい反面、急な傾斜や、石英などの鉱物を含む土壌などから農機具を痛めるなど様々な苦勞も伴いました。波状丘陵の形成と苦勞して実りの

丘をつくった農業の営みを紹介します。このストーリーを展開する施設は、美瑛町の成立ちや歴史の紹介のほか、日中でも星を観測できる天文台を併設している「美瑛町丘のまち郷土学館（美宙）」です。



波状丘陵（波打つ丘）



美瑛町丘のまち郷土学館「美宙」

### 十勝岳泥流のつめ痕に北の大地を切り拓く 火山災害と復興を伝える

1926年に発生した十勝岳噴火に伴う融雪型火山泥流は、144名もの犠牲者を出し、多くの農地を埋め尽くしました。火山災害の悲惨さと復興に苦しんだ当時の開拓民の姿を、



1926年の泥流災害

三浦綾子の小説「泥流地帯」「続・泥流地帯」のストーリーとともに多くの人に伝えていきます。「上富良野町郷土館」では、こ



上富良野町郷土館

このストーリーを展開し、上富良野町の成り立ちや開拓の歴史、十勝岳の災害史を展示しています。

### 十勝岳ジオパークを学ぶ施設

このエリアのジオツーリズムの拠点となるのが、十勝岳の火山情報の収集と発信を担っている「十勝岳火山砂防情報センター」です。噴火や泥流の発生が予測された場合には、最前線の対策本部として機能するとともに、地域住民の一時的な避難所としての役割も果たします。

火山と共生する地域づくりを展開するため、通常は、展示室を一般の見学者にも開放し、十勝岳の噴火の記録や火山砂防事業などを学ぶことができます。

### 私たちの活動目標

#### 目標1 「いつかおきる火山災害に2町で協力して備えたい」 地域総合防災訓練

十勝岳は、わずか96年前に144名の犠牲者を出し、その後も2回のマグマ噴火を起こしました。かつての悪夢を再び繰り返さないためにも、2つの町が一体となった取組みを進めています。

十勝岳の火山砂防事業としては、1988年の噴火後に

国や北海道による砂防えん堤などの整備が迅速に進められてきました。地域においては、十勝



総合防災訓練

岳の噴火を想定した「総合防災訓練」を、美瑛町・上富良野町を含め6市町30団体機関で実施しているほか、



火口調査

十勝岳火山防災協議会が主催する十勝岳火口の観測登山に同行し、噴火口や噴煙などの状況を観察し、関係者に対して堆積物や火山弾の解説を行っています。

#### 目標2 「火山と自然について地域みんなで学びたい」 防災教育

火山と共生するまちづくりを進めるため、国や北海道など関係機関と連携して、火山災害と復興を通じた郷土の学習に取り組んでいます。

火山噴火のしくみや砂防施設の機能、地域資源の保全と活用のほか、災害から命を守る「自助・共助・公助」について学ぶ機会を、学校教育・社会教育をはじめ、ツーリズムを通じて広く一般に提供しています。



模型実験（砂防施設の役割）



十勝岳美瑛川第1号えん堤施設見学

#### 目標3 「恵まれた環境と文化を将来に残したい」

農業とともに観光業も盛んで、十勝岳連峰の山岳風景をはじめ、波状丘陵に広がる農村景観、ラベンダー



美しい農村風景

畑、十勝岳山麓の温泉などが観光資源となっています。

特に、美しい農村景観は、大規模火山噴火による火砕流堆積物が侵食されてつくられた、なだらかな地形の上に広がっています。大規模農業を可能とする広大な農地を提供する一方で、作物栽培のための栄養分に乏しく、連作障害を引き起こしやすいため「ジャガイモ、小麦、豆類、ビート」などを輪作することで、この欠点を解消しています。輪作のプロセスにより、毎年、季節ごと、時間ごとに変化する美しい農村景観の彩りを楽しむことができます。

地域では、こうした環境と景観を保全するために環境省が毎年8月に実施している「自然公園クリーンデー」をはじめ、山岳エリアや波状丘陵、文化サイトが存在する主要道路付近を対象に、住民参画による清掃活動や植樹・植栽活動が活発に行われています。

また、児童生徒による活動も多く、高校生ボランティアによる登山道整備や中学生・高校生も参加する清掃



十勝岳望岳周辺の清掃活動



小学生による清掃活動

活動などの多くの保全活動に地域を上げて取り組んでいます。特に、小学生で構成する十勝岳愛護少年団の清掃活動は、50年以上も継続しています。

地域内にはアイヌ民族が定住した痕跡はありませんが、「フラヌイ（臭気のある場所の意。富良野の語源）」や「ピイエ（油の意。美瑛の語源）」など、多数のアイヌ語地名が存在します。そこで、アイヌ民族との共存を主張したことで知られる北海道の名付けの親「松浦武四郎」の足跡とアイヌ語地名を辿るツアーを商品化しました。

十勝岳ジオパークに伝わる祭り文化は、いずれも火山災害による犠牲者の慰霊と災害からの復興、火山との共生を象徴しています。地域の祭りとして盛大なものに、「那智・美瑛火祭」「北の大文字」があります。いずれも「火祭り」の要素を持ち、美瑛町の那智・美瑛火祭は1988年の十勝岳噴火を契機に、美瑛神社で熾した忌火を十勝岳に供え、その火を松明に灯して神社に奉納し、火山活動の沈静化とまちの活性化を祈願する目的で始まりました。上富良野町の北の大文字



商品化したツアーの状況



那智・美瑛火祭



北の大文字

は、1926年の泥流災害を偲<sup>しの</sup>び、復興をたたえるとともに、活火山「十勝岳」の安静と地域の発展を願う行事です。

#### 目標4 「地域を愛してほしい」

このエリアを訪れる観光客は、40年前の1980年は46万人ほどでしたが、2019年には300万人を超えるなど、この40年間で6倍以上に急増しました。過疎化が進行するなか、交流人口の増加によりにぎわいを見せるなか、美しい景観を見せる農地への侵入などオーバーツーリズム（観光公害）も生じていることから、観光協会をはじめ、関係団体と連携し地域資源である「丘」を守る取組みを強力に進めています。



地域の各種体験

#### 目標5 「世界の様々な地域と連携・情報交換したい」

十勝岳ジオパークは、地域の優れた景観を全世界にアピールするとともに、地域に残された諸問題に取り組めます。すなわち、地球温暖化に伴う気象災害、あらゆるジオハザード、人口減少とコミュニティの

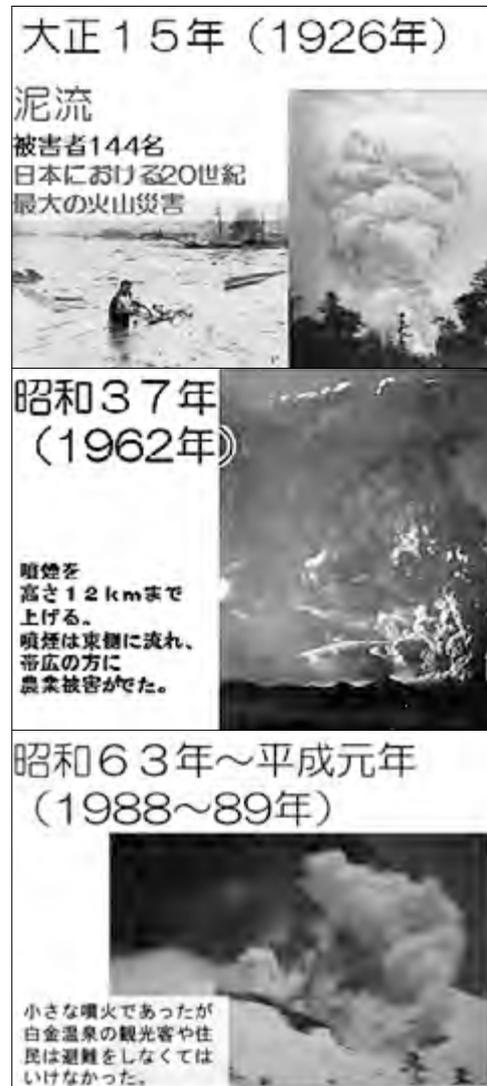


地域の噴火の歴史と復興のまちづくりを語る外国人ツアー

縮小、地域資源のオーバーユースと観光公害、といった問題について広く世界と情報共有し、議論し、より良い将来のためにも行動します。

#### 十勝岳の噴火災害と対策

十勝岳では、1926年に中央火口で噴火が起こり、融雪型泥流を発生させました。1962年には前十勝付近で相次いで噴火し、62火口群を形成しました。62-II火口では1988～1989年にも噴火が発生し、活発な地熱活動や噴気活動は現在も続いています。このように、わずか100年の間に3回のマグマ噴火を繰り返した十勝岳は、近い将来の噴火が予想されているため、火山活動の常時監視が行われています。



(写真は旭川地方気象台提供)

また、山麓の美瑛町・上富良野町では、前述したように、最も多くの犠牲者を出した1926年の噴火を想定した総合防災訓練を実施しています。訓練は積雪期である2月に実施し、伝達・初動・避難・誘導・救助救出訓練のほか、ド



救助訓練

ローンによる映像の提供を行い、関係機関との連携強化を図っています。

### かつての悪夢を再び繰り返さないために

美瑛町・上富良野町の二つの町が一体となり、「火山と共生するまちづくり」を進めるために「十勝岳ジオパーク」を推進しています。

2015年に、地域の持続可能な発展を目指すため、53の構成団体による協議会が設立されました。シンボルとなるロゴマークは全国公募し、約80作品の中から「十勝岳・波状丘陵」など地域の特色が活かされたデザイ



ンを選考し、2018年には「丘と火山がおりなす彩り」にテーマを修正してきました。以後、組織体制の強化を図りながらボトムアップによる運営を推進し、2022年1月28日に日本ジオパークに認定されました。

このロゴマークは、十勝岳と波状丘陵をモチーフにして制作しました。

### 拠点施設の整備

私たちが、地域の良さや価値を理解し、誇りを持って普及させ、観光や教育に活用しながら地域の活性化を推進していくため、旭川開発建設部の支援を受けながらジオパーク活動の核となる拠点施設の整備を進めていきます。

拠点施設では、地域の自然や環境、そしてジオパーク活動を紹介するモニターを設置するほか、火山やプレート模型、岩石標本、視聴覚器など、地域を学び理解するために必要な施設整備を行い、学習・体験の場として機能を高めていきます。



1F シアター (写真：旭川河川事務所提供)



2F体験室

### 持続可能なまちづくりへ

私たちは、地球科学に立脚した教育・研究を推進し、地球環境と地域遺産の保全と活用を手段として、持続可能な地域の発展を目指すというユネスコ世界ジオパークの理念に共感し、世界のあらゆる地域と協力・連携して「地球と共生する地域づくり」を推進します。